# 第四章　町立久万美術館

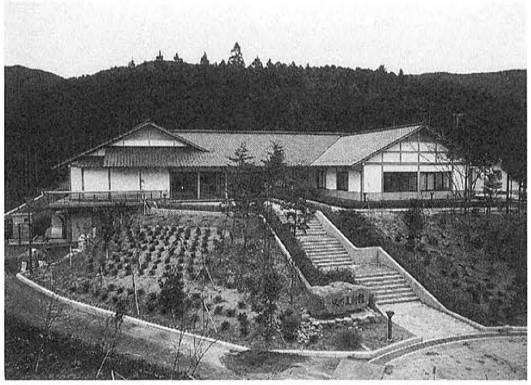
## 一　美術館建設の動機

井部栄治先生が久万町ご出身で、林業を中心に活躍され、町政・県政など地方行政の面でも大きな足跡を残された方であることは、町民の方々も十分承知されていることと思う。今回久万町菅生に誕生する町立久万美術館は、この井部先生が全てのきっかけを作られたものである。

先生は昭和二〇～三〇年代を中心に、早くから美術方面に関心を示され、以降熱心なご研究で美術史全般に深い認識を持たれ、大変見識の高い作品群を収集されていた。このことは、その道の人々の間では大変興味深いこととなっていたが、詳細全貌はほとんど知られることもなかった。

その井部先生が政界から手を引かれ、久万町の森林組合長をなさっておられたころ、雑談の中で河野修現町長に時折話しかけてこられたようだ。「河野君、久万に美術館を作らんかね。少しはいいものもあって、新聞社が借りに来ることもあるのよ。考えてみんかね。」町長は以後ずっとそのお話が心に残り、いろいろ思案をめぐらされたようだ。「先生のすばらしいコレクションはいただきたいし…」「しかし、それを十分生かしきる美術館が久万にできるものだろうか？」「町民のみなさんの同意を得ることはできるものだろうか……」

このような状況がずっと続いていた中での約三年前、このお話は急速に進展することになった。昭和六一年の五月、日本画家の石井南放先生が松山から久万町舎へ来られ、井部先生とご家族の方々のご好意で、コレクションを久万町へ寄贈していただける方向に進むことになった。そして、石井先生は、「井部先生のコレクションはどういう内容のもので、どういう意味をもつものか」また、「ご寄贈いただくに当っては、町内でどういう状況を整えていくことが望ましいか」「美術館が町にあることは、どういうことなのか」等、広い角度からいろいろお話下さった。



町立久万美術館全景

これを受けて町内では、早速検討が始まった。町の理事者、議会の方々、識者美術文化関係の方々など、時間をかけて熱心に、かつ慎重に議論が繰り返された。その結果議会の方々を中心に大変深い理解と同意を得るところとなり、町長はついに決断することになった。そして、「久万に、町立美術館を建てよう」「この美術館には、井部先生にいただくコレクションを収蔵し、優れた展示と保存をしていこう」「久万町に作る美術館は、木の町にふさわしい木造美術館にしよう」　町として、これらの方向に進んでいくことになった。

## 二　建設への経過

●昭和六一年　七月　二日

久万美術館建設研究会を開催。井部コレクションを町へ寄贈いただくことの趣旨説明を行い、参加者である各種団体の代表者や有識者から美術館建設についての率直な意見を拝聴した。全体として建設を望む意見で一致した。

●同　年　一〇月一一日

久万町美術館建設専門委員会を開催。委員長上岡義幸氏、副委員長野村政良氏を選任、建設への経過説明を町理事者が行い、用地選定確保、県内美術館視察などを決めて、美術館建設に備えることになった。

●昭和六二年　三月一八日

美術館建設を議決した。翌一九日、第三回美術館建設専門委員会を開催。菅生のアメニティゾーンに位置する久万公園の南高台の現在地に、美術館建設予定地を決める。久万町内や、遠く四国山脈が望める県道沿いの杉木立に囲まれた最高の環境地である。

●同　年　四月七日

ある方の紹介で建築家であり文化庁文化財保護部主任文化財調査官半澤重信先生に面会、林業の町にふさわしい木造美術館を建てようと思っているのだが、はたして可能なのかどうか。館の運営上にさしさわりはないのだろうか。文化庁の見解をたずねた。先生は、「美術館は、先ず、美術品を立派に保存することに有る。木は一番それに適している。日本古来からのすばらしい保存法、その保守的な良さを積極的に活用して行こうという久万町の考え方は大変すばらしい。問題があるどころか、大いにけっこうです。こういう美術館が全国でせめて一ヶ所くらいは有ってほしいと私は願っていたところです。」と、おどろきと少し興奮ぎみに話された。そして、「できる限り私にもお手伝いをさせて下さい。ご協力いたします。」と進んで協力を申し出られた。以来設計から建築現場まで、さらに照明や空調に至るまで丁寧に御指導をいただいた。

●同　年　四月二二日

大手設計業者の中から美術館等に経験豊富な五社を指名して競争入札を行った結果、㈱日本総合建築事務所に決定した。

●同　年　四月三〇日

まちづくり特別対策事業（美術館建設事業）のヒヤリングが県庁で行われた。

●同　年　五月　八日

基本設計提出。これまでは設計業者側のアイデアで進んできた。

●同　年　五月一九日

六二年度の第一回久万美術館専門委員会を開催。町議会議員選挙のため一部委員の交替が有り、新しい委員長に西岡忠義氏を選任して、菅生の建設地を視察、基本設計書をもとに検討を行った。

●同　年　六月一七日

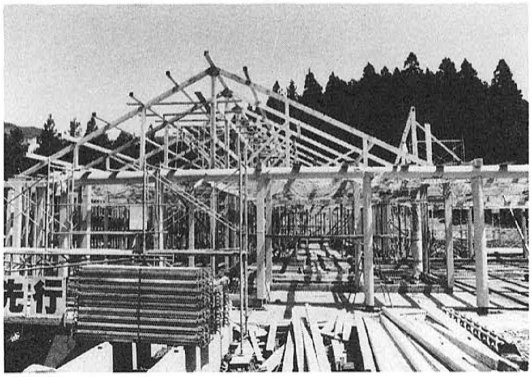
町長の諮問機関として、専門家による美術館基本構想委員会が発足、基本構想の検討を開始した。以後五回会議を開く。

●同　年　六月中旬

建設用地の買収を完了した。

●同　年　九月一四日

町長へ基本構想の答申を行った。理念、機能、資料、組織、展示、教育普及、施設、名称、将来計画の九項目から成り、久万美術館が進むべき方向を示している。なお、この期間中、美術館の運営面や、観覧者の動線などを考慮した平面計画、展示計画、保存上の問題点など実施設計に向けての適切な助言も行われた。



建築中の町立久万美術館（昭和63年６月）

●同　年　一〇月一九日
大手の建設業者一一社による工事請負入札を実施した結果、㈱熊谷組に決定した。

●同　年　一〇月二三日
臨時町議会を開催、建築工事の契約案件が議決され美術館建築が現実のものとなった。

●同　年　一一月一八日
美術館開館準備委員会が発足、開館へ向けて準備が進められることになった。

●同　年　一二月　四日
およそ一カ月前から取りかかっていた造成工事も終り、うっすらと雪化粧された建設地で起工式が行われた。同年八月、建築に先がけて建築部材の検討を行い、展示室の陸梁や登梁の長尺ものの特殊材を、早速町有林で伐倒した。一一月上旬、この調達材を搬出、松山の製材所で製材して建築に備えた。主要な構造部材は久万産の杉桧が使用され、その材積は一八〇立方メートルに及ぶ。

●昭和六三年　七月三一日
起工式からおよそ八カ月後に、一部庭園等の工事を残して竣工した。

●同　年　一一月一〇日
町立久万美術館の落成式を行う。町内関係者、設計施工業者等約九〇名が参加した。

## 三　施設の特色

### ア　意匠計画

敷地は、森林山草園用地を合わせると約一、七㌶である。周囲の杉木立とも良くマッチするよう、外壁は漆喰塗り柱現わしとして、腰板を設け、屋根は、いぶし銀の瓦葺とした。回廊には円柱の手すりを設置、展示室には越屋根を設けて自然光を取り入れるようにしている。

自然の地形を出来るだけ残して造成し、ロータリーから一段高い所に本館を配した。

素朴な切妻の木造美術館は、静けさの風景に落ちつきをただよわせている。

### イ　平面計画

美術館の象徴的空間であるエントランスホールは、それぞれの使用目的空間に明快に導く動線処理の起点である。出来るだけゆったりとくつろげる広い桧の板ばり、大きな窓を設けており外の景色をながめることができる。

展示室は、第一室と二室が日本画・書用に、第三室と四室が日本近代用画用に、そして五室が陶磁器展示用に作られている。一室と四室の間に移動壁を設けており、企画展示など、目的に合った展示も可能にしている。展示ケースは、無色透明のミュージアムグラスを使用、作品の生の色彩が観賞でき、また、紫外線カットの照明を用い、照度も自由にコントロールできるようにしている。床はジュータンを使って吸音に気を

配った。

事務学芸員室、館長室などの施設管理、研究部門は、収蔵庫側に集中して設けた。

収蔵庫は、外からの防火に対応して鉄筋コンクリート造りとし、その壁面から三〇センチ程度はなれた内側に杉板と調湿板で囲って部屋を設けている。その壁の間の空気をゆるやかに循環させて湿度をコントロールさせる。

芸術品をいためないためには、動線を、最短でしかも直線に結ぶと良い、収蔵庫と展示室の間をそのように努めたが、床面積要件や木構造上思うところに思いどおりの空間が取れず、廊下の角が出来た。

## 四　施設の概要

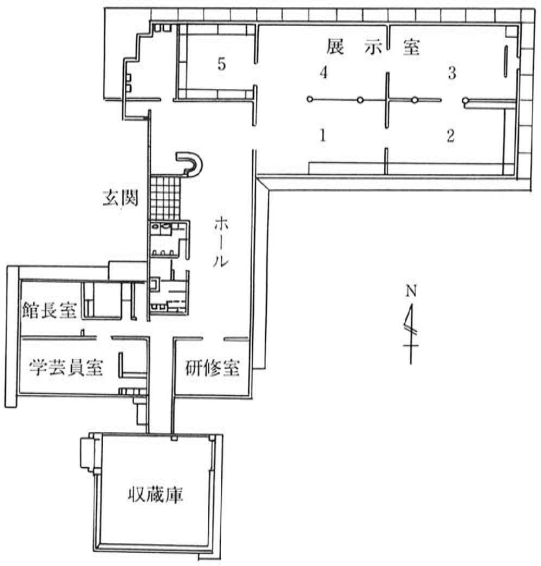
規模と構造

建築場所　上浮穴郡久万町大字菅生二番耕地一四四二―七
敷地面積　六四四三平方メートル
建築面積　一〇五四・三五平方メートル
延床面積　一〇六三・五六平方メートル
構　造　（本棟）木造瓦葺、外壁漆喰塗り柱現わし平家建
（収蔵庫）鉄筋コンクリート平家建、一部二階
駐車台数　約三〇台
設計者　広島市中区東千田町二丁目九番五七号
株式会社　日本総合建築事務所広島支所
施工者　高松市中央町一六番一六号
株式会社熊谷組四国支店

指　導　文化庁文化財保護部
文部技官主任文化財調査官　半澤重信
工　期　着工　昭和六二年一〇月二四日
完成　昭和六三年　七月三一日

事業費概要

| | |
|---|---|
| 建築本体工事費 | 三億　五一一万一千円 |
| 付帯工事費 | 二二四八万九千円 |
| 造成工事費 | 二六九〇万　円 |
| 設計監理委託費 | 一〇五〇万　円 |
| 用地所得費 | 二四七一万一千円 |
| その他　事務費 | 四〇〇万　円 |
| 合　計 | 三億九三七一万一千円 |

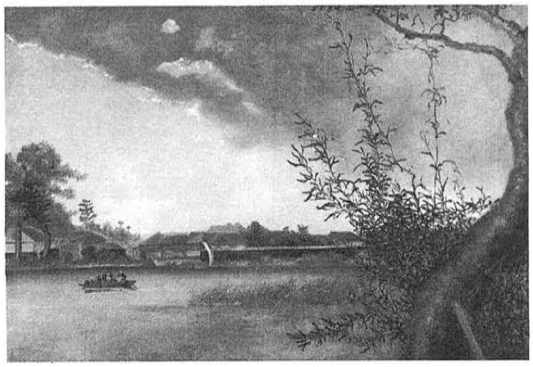


町立久万美術館平面図

## 五　収蔵される作品

現在のところ久万美術館が所有する作品＝館蔵品は、全て井部先生からいただいたものだけである。そのいただいたコレクションは、洋画（八四点）・日本書画（一三七点）・陶磁器（九八点）、合わせて三一九点にのぼる。

日本書画の書の部には、伊予の三筆といわれた伊藤子礼・明月・蔵山らの豪放な書があり、他に米山・誠拙など伊予の地で広く親しまれた宗教家・武家・学者らの作が、数多く並んでいる。日本画の分野でも同様に、江戸時代以降の地元の作がそろっている。松山藩の武士・吉田蔵澤の墨竹や松山藩の絵師・遠藤広実の久万山絵図（三巻）は、その中心になっている。一方、陶磁器も伊予の国の江戸以降の作を集めたもので、大洲の柳瀬焼・五郎焼・松山近郊のなぞの窯・瀬戸助らしき作、川内の松瀬川焼・則之内焼など、伊予陶磁史の中で特に話題を呼んだものを集めている。そのため、コレクションに興味深いストーリーがついているものが多い。



高橋由一「真崎図」

しかし、何んと言っても久万美術館の中核となって、展示室で注目をあびるのは洋画であろう。洋画の部門には、全国的にもAクラスの作品が並んでいる。日本の洋画史は、明治維新の少し前から始まった。当時ヨーロッパから伝わってきた洋画作品に接した絵画関係者の中には、その描写の迫力に圧倒され、自ら独学に近い形で油絵具を習い始めた者もいた。そんな一人が高橋由一であり、五姓田芳柳（二世）であり、浅井忠らであった。久万美術館には、彼らの作品から揃っている。この後に続いたのが黒田清輝であり、久米桂一郎・鹿子木孟郎であった。彼らは自分でヨーロッパに渡り、当時印象派と呼ばれた人たちから大きな影響を受け、野外の光の中で動く色彩に心をひかれていった。この画家たちを外光派と呼び、この後ずっと日本の洋画界の中心になっていった。

村山槐多「裸婦」

しかし、明治の終わりごろから、高橋・浅井・黒田・久米らのアカデミズムに対抗する人たちが出た。それはヨーロッパの後期印象派や、マチスらの野獣派の影響を受けた人たちで、今までの絵画の考え方からすっかり抜け出し、個性を重んじた大胆な表現をする人たちであった。それが万鉄五郎・村山槐多・長谷川利行らで、久万美術館には彼らの貴重な作品が揃っている。彼らは日本の洋画史の中で大切な働きをしたに

もかかわらず、長い間ほとんど認められることがなかった。しかしこのあばれん坊たちの作品を、井部先生は重要な位置におき、ちゃんと集めておられたわけである。

昭和六一年一二月、松山市内で初めて井部コレクションの洋画を全部並べた時見て下さったブリヂストン美術館学芸課長の阿部信雄先生は、「井部氏のコレクションは、アカデミズム作家に混じってアバンギャルド作家（万鉄五郎や村山槐多のこと）たちの作品が、ちゃんと入っている。これは井部氏が日本洋画の歴史を全て知っていたのでできたことだ。個人でこれだけのことをした方は、全国的にも珍しい」と、大変高い評価を下さった。

## 六　今後の計画と対応

以上述べたように、井部コレクションは大変高い評価を受けている。そのため、その筋の人たちから全国的にも注目されている。したがって今後遠方の地から「久万美術館の作品はどうしても見たかった」と訪ねて来られるケースが考えられる。と言うことは、大切な作品を簡単に外したり、予告もなく休館することは許されない。常に意図をもったはっきりした計画のもとに展覧会を組み立てながら運営して行かなければならない。この考えに基づき、全国の美術館等にご協力を得ながら作品を借り受け、順次企画展を実現していかなければ…と考えている。

また公立美術館というものは末代まで続くものであるから、しっかりした構想のもとに館蔵品をふやしていかなければならない。単なる流行にのった有名画人を追っかけたり、値上がりを見込んで購入しようとしたりする姿勢では、美術館としての存在の意味がなくなる。こういう点でも久万美術館は、見識高い方々のご意見をいただきながら、極めて慎重に進めていかなければならない。

久万美術館展示室内部

井部先生はコレクションを育んで来られた中で、洲之内徹氏とは大変親密な間柄であった。洲之内氏は松山市出身で、中央で長く美術評論活動をされた方で、時にはきびしいライバルの間柄でもあった。そういうことで井部氏のコレクションと洲之内氏のコレクションは、無二の兄弟コレクションだと言える。その洲之内氏も、井部氏と同じ昭和六二年に、相前後して逝去された。そしてそのコレクションは、縁あって宮城県立美術館に保存されることになった。久万美術館としては、この合同コレクション展を実現したいものである。